男子厨房に立つ春

一字一筆 静岡の今

早咲きの桜が早くも見頃という伊豆・河津町で、毎年行われる「料理教室」がある。生徒は、一人暮らしの「老人男性」に限られる。同町社会福祉協議会企画の福祉事業で今年も2回開かれ、それぞれ十数人が栄養士の指導を受けながら慣れない手つきでハンバーグ作りなどに挑戦した。

男性料理教室――ハンバーグ作りに挑戦する一人暮らしのお年寄り＝河津町、全日写連竹之内範明さん撮影

家事や育児などかつては「女性専科」と言われた領域に、男性が入り込むようになって久しい。「イクメン」が新語・流行語大賞のトップテン入りしたのは2010年だった。代表的な「家事」である厨房（ちゅうぼう）に男性が入り込むのも、違和感のない時代になった。

ただ、河津町の「男性料理教室」はそんな時代を先取りしたものではない。人口8千人弱の町には「桜祭り」の1カ月間だけで人口の約100倍の観光客が押し寄せるが、定住人口は減るばかり。加えて人口に占める65歳以上の割合は39・4％で県内屈指の高齢化地域である。勢い一人暮らしの男性老人も増える。だから料理教室は、彼らの生きるための「手習い」である。高齢化率40％を超える隣接の松崎町でも「男性料理教室」に通う独居老人が多い。

日本の家事の変遷をたどると、洗濯機など「三種の神器」が、主婦たちの負担を劇的に軽減した時代があった。その後に、女性の社会進出時代が来る。そして、今や育児や家事の「男女分担制」が抵抗なく行われる社会になってきている。そうした文脈とは異なる理由で「男子厨房に立つ」時代が来たということなのか。

春を先取りする伊豆の町々が、「家事変遷の歴史」に新たな標識を建てようとしている。

（前静岡県監査委員　富永久雄）